

昭和24年白潟大火から70年 「災害からあなたの家族とまちを守る」
防災フェア白潟 ～住民同士の助け合いによる防災力の醸成～

松江市 白潟公民館

1 白潟地区の概要

白潟地区は松江藩開府以来、町人や寺の町として町割りされ、経済産業の中心地として栄え、街並みや小路に今もその栄華が偲ばれる。

しかし、公共施設の移転や郊外大型店舗への変化等により商店街が衰退し、少子高齢化によるドーナツ化現象から人口減少が進んでいる。また当面継続していく大橋川拡幅工事に伴い、白潟地区の町づくりも大きな課題となっている。

このような現状の中、地区高齢化率も36%を超え、人口も約3,100名、世帯数は1,600余りとなっており、1995年（平成7年）には地区から小学校もなくなり現在に至っている。

2 事業の趣旨

(1) 「防災フェア白潟」の開催

自然災害は何時どこでどんな災害が起こるのかは想定できず、地区住民が安心安全に暮らせるような支え合いの支援体制を構築していくことが大切と言われている。昨年度、地域コミュニティの推進や白潟地区の防災力の向上を目指して白潟地区防災会議を設立した。そして2019年が209棟が全焼する惨事となった昭和24年の白潟大火から70年目になることから、楽しく学べる防災イベント（防災フェア）を次の目的で開催することとした。

ア 防災意識の醸成

楽しく学び、子ども達からお年寄りまで全ての地区住民が防災に関心をもち、災害に備えていこうとする意識を高める。

イ 地域コミュニティの推進

地域で安心安全に暮らしていくために

住民が地域コミュニティを進め、住民同士が助け合う地域の総合的な力を高める。

ウ リーダーの育成

災害対策本部の5つの班長、副班長をリーダーとして実行委員会を組織する。各班所属の地区関係団体のリーダーとも繋がり企画運営に当たることで、地区全体のリーダーとして育成を図る。

(2) 大火等の記録のデータ化と保存

大火に関わる記録等をデータ化し、また地域住民に公開することで、防災意識の向上につなげる。

3 具体的な取組内容

「防災フェア白潟」実行委員会を組織し、5つの班を中心にして内容を決定していった。各班でも班長を中心にして話し合い、具体的な当日の運営について準備を進め、8月25日に開催した。

「体験」「学ぶ」「講演」のイベントブースを設置し、当日は支援団体から30名、地域の実行委員76名が運営に当たった。そのいくつかを紹介する。

「体験」では自衛隊出雲駐屯部隊に炊事車を派遣していただき、調理は5名の隊員が行い200食のカレーを用意した。来場者が予想を超えたため、スタッフは対応に苦慮したが大変好評であった。また、松江市消防本部には地震体験車、支援車を派遣していただき、災害の模擬体験や災害地派遣



カレーを調理する隊員

の実際を目の当たりにできる機会となった。そして消火体験では各地区の自主防災隊員も子どもたちの指導

に当たった。



炊事車による
カレーの炊出し

「学ぶ」では、松江市防災安全課の協力を得て、避難所体験そして防災グッズ作製を行った。特に実行委員が事前に研修し、当日は新聞スリッパや簡易マスク作製の指導を担当し、たくさん子ども達や親子連れが参加した。また、日本赤十字社島根県支部には「災害時の生活支援講習会」を開催していただき、地域の福祉推進員や民生児童委員を中心に受講した。

「講演」では、講師に陸上自衛隊練馬駐屯地業務隊長、一等陸佐の山口芳正氏に「災害時における地域防災の在り方」という演題で、午後の防災フェア2部でお話をいただいた。東日本大震災に伴う災害派遣にも触れるなど、これまでの長い経験から貴重なお話をいただき、防災の基本は「自助」「共助」であるという結言は、その重要性を改めて認識するものであった。



山口芳正氏の講演会

子どもたちの参加には、スタンプラリーで会場を巡る工夫をした。

「記録の展示」では、少数ではあるが地域の方から当時の新聞のコピーや、小学生の作文（小学校からのお便り）等をお持ちいただいた。また、地区外の方から貴重な写真を寄贈いただき、データ化のうえ拡大して公民館まつりに展示することができた。



寄贈された写真
(みずほ銀行前)
昭和二十四年白濁大火

4 評価と成果

(1) 小学生がスタンプラリーも楽しみながら、大人と一緒に様々な体験を楽しむ姿があった。また就学前の子ども達の親子連れの姿も多く、それぞれのブースでゆっくりと過ごすなど、来場者は様々な体験や製作等の学びを通して、防災意識を高める機会となった。前日までの準備、そして当日は76名の実行委員が早朝からの準備やそれぞれのブース運営に関わり、支援団体と協力しながら、主体的に運営に当たった。

(2) 白濁地区防災会議を防災フェア白濁実行委員会に移行して取り組むことで、組織が機能的に働くように見直しもなされた。

また各班で準備から運営や片付けに取り組み、リーダー同士が繋がりネットワークが広がる等、地区のリーダーの自覚を持ちながら力を発揮する機会となった。

5 今後の課題と見通し

(1) 災害時に白濁地区防災会議が組織的に動き、住民同士が助け合う地域の防災力を高めることが課題である。フェアの後、町内単独の事業の中でミニ防災フェアを開催したり、会合の中で非常食の試食をしたりと、防災に関わる取り組みが小さな単位で行われる様子も見られている。来年度に向けて有意義な白濁地区防災会議としての取組を関係者で検討していく予定である。

(2) 若手リーダーの育成には課題があった。まちづくり等に関わり、若いパワーで取り組んでいる地元の人材が、少しずつでも公民館活動に参加し、地域につながっていくように働きかけたい。

(文責：館長 松本道博)